英詩の翻訳 ——リズム重視か内容重視か

向 山 淳 子

本学英文学科現三年生が昨年度，「英文学講読Ｉ」のクラスでギリシャ神話をセービン（Sabin）のテキストを使って読み，クラス全体が協力してその基本を「ギリシャ十二神とその周辺」(140ページ）にまとめあげた。ギリシャ神話は英文学の研究に欠かせない基本的な資料であるが，児童文学の研究にもいくつかの大切な基本ストーリーを知っておく必要がある。冬期休業を利用して，英米の子供達ならおそらく誰でも知っているストーリーの“The Night Before Christmas”を日本語に訳すことにし，クラス全体がこれに参加した。

竹友藻風の「文学論」(1947年 高桐書院発行）の中で，優れた翻訳はそれ自体文学的価値がある旨述べられている。「文学が言葉の媒材とする藝術であることは優れた翻譯を原文と比較して見ることに依って分かる」(p. 27）と言い，ロバート・ブラウニングの“Apparitions”を和訳した上田敏の「出現」の出来栄えを讃え，「この譯は決して逐語譯ではない。譯詩は寧ろそれ自らひとつの創作のやうなものであるが，それにも拘わらず，原の詩の意味を傳へたものであることは十分に分かる。しかも，その一字一字，意味を離れて見れば原の言葉を髣髴させるほどの手がかりさへないのである。」と述べている（p. 30)。上田敏の詩心と総合的な文学力が彼の翻訳を優秀なものにしたのである。

しかしながら，上田敏のような特別な能力を持ちあわせていない我々一般の日本人は翻訳に際し，どのように工夫をすればよいのであろうか。殊に大学生が英散文・英詩を和訳するときどんな点に注意を払えばよいかということが問題になってくる。

基本的にはまず原文に忠実に訳すことが大学生には必要なことである。不必要に意訳に進むことは好ましくない。しかしながら，原文にこだわり過ぎてぎこちない訳文になることも避けなければならない。

アメリカに於ける初期のクリスマス・クラシックのうちでも不朽の名作となった“The Night Before Christmas”は，1822年ニューヨークで聖書史を教えていたムーア博士（Dr. Clement Clarke Moore）が“A Visit from St. Nicholas”という題で六人の子供達のために書いたものである。翌1823年，著者に断らずに出版されてしまったが，1844年著者の詩集のなかに入れられて再び世に出た。以来，英語圏は勿論のこと広く世界中の大人にも子供にも読まれるようになった。

我が国にも訳本はないかと長年探していたが，1980年に中村妙子氏による「訳本」が出ていることがわかった。その第9刷版（偕成社，1990）を学生達が見付けて来た。この「訳本」はランド・マックナリ（Rand McNally)社の原本をもとに訳されて，ターシャ・チューダ(Tasha Tudor)の美しい挿絵とともにある。就学以前の子供達には言葉の意味を理解させることよりもむしろリズムを楽しませることのほうがよい場合も多い。この「訳詩」は短く，易しく，しかも原本のイメージを壊さないように配慮されている。しかし，省略されたり，付け加えたりされた箇所が多いので，訳詩というよりretoldとして紹介されるのが適当だとおもわれる。

この原作は幼少の子供ばかりでなく広く大人にまで親しまれてきた。そこで，大学生に一つの教材としてこの作品の和訳に挑戦してもらうことにした。口頭で和訳するのと活字にするのとでは，後者のほうがはるかに慎重さがともなう。題材が比較的にやさしくても活字にして公けにするということで大学生らしい努力が発揮できるのではないかと思われた。

もともと原作は“A Visit from St. Nicholas”と題されていたためか，中村訳では「サンタクロースがやってきた」という副題がそえられている。幼児には，この副題によってストーリーが始まる前に内容が何であるかを察し得て，読んだり，聴いたりすることが容易にできるであろう。しかし，原詩の第一行目に由来するとおもわれる題名“The Night Before

Christmas” の方が初めにズバリ答えを教えてしまうのと異なって，読む人・聴く人の想像力を掻き立てるものである。

和訳するとき，基本的な英文法は勿論必要であるが，リズムを合わせたり，脚韻を合わせたりして雰囲気をかもしだす際に，文法を多少融通して全体を調整しなければならない。例えば，日本語にしなくてもよい時間のitを「あれは」と訳したり（*l*.1）受動態を能動態にして「くつしたつりさげて。」(*l*.4）としたり，過去についての話であるが，読み手・聴き手にのめり込ませるのに，過去形を現在形にかえてみる（話し手がベッドから跳び起き窓に駆け付けるシーン以後，（*l*.10)。“sugarplums” はあんずの砂糖菓子で，チョコレートやアイスクリームなどが夢のまた夢であった当時の子供達には，このシュガープラムはどんなに楽しみのものであっただろう。これを単に「おかし」(中村訳）と訳するのも単純すぎるし,「あんずの砂糖菓子」と訳せば現在の子供達にはあまり美味しそうな感じを与えないであろうから，シュガープラムのままを使ってみた（三年生訳)。子供達がわくわくして待つシュガープラムのイメージが “danced in their heads ” と原作にあるが，この “danced in their heads ” がただ「ゆめを　みる」だけでは “danced” の意味が弱まってしまうのだが，今回は改良できなかった。

スカーフをあたまに巻いたり，ナイトキャップを巻いて髪の形が崩れないようにする昔の習慣（*l*.7）は今の子供達には理解出来ないかもしれないが，朝シャンの流行るこのごろのことだから髪を手入れすることは理解出来ないことではない。中村訳ではこの箇所は「ねじたく　すませた　かあさんが／ふっとろうそく　ふきけすと／『おやすみ。』と　とうさんも　めをつむる。」と訳されている。これは和訳というよりはretold といったほうがよい。

シャッターは現今では巻き上げて使う日よけではあるが，Tudor が描いている横開きの日よけ戸の方が時代的にふさわしいと思う。しかし，すばやい動作の伴うこのシーンに「シャッター」の方が短くてよい（*l*.12)。“breast”(*l*.13）は雪がふっくらと積もっている様子であるがあまり説明

的になると一行が長くなるのと想像力を弱くしてしまう。次に，中村訳では語り手が「むっくり　おきあがる」とか「そうっとベッドをぬけだすと」とあるが「むっくり」とか「そうっと」で“sprang”(*l*.10) とか“flew like a flash”(*l*.11) の意が生きてこない。“so lively and quick”(*l*.17)「たづな さばきも あざやかな」と訳されたのは確かに見事な訳ではあるが少しオーバーであるし他の行の分かり易い訳に比べて不釣り合いである。

23行目の“To the top of the porch, to the top of the wall !”は「かべを つたって やねへ でろ。」(中村訳) ではもとの意味からかなりかけ離れている。次に，そりは小さくて，障害物に出会うと，嵐に吹き飛ばされ枯れ葉のように舞い上がるのであって，中村訳では障害物がなくてもまいあがるように訳され，しかも「まいあがると，……ゆきを けたてて ときすすむ」とある。舞い上がれば，けたてる雪はないはずである。

寒い風に当たったサンタクロースの赤い頬や鼻はバラの花やサクランボにたとえられ，口の形は弓の形にたとえられ，あごひげの白さは雪にたとえられ，笑うと揺れる腹部はボールに入れられたゼリーにたとえられている。このような比喩は読む者の想像をかきたてる。中村訳にはこのゼリーが抜けているのが残念である。“a twist of head”(*l*.47) は「うなずく」のではなく「首を横に振る」ことである。

サンタクロースがどんな方法で煙突を昇るかが読者の興味をそそる。“laying his finger aside his nose…” は「鼻の横に指をおき，／頭を縦にふると……」煙突をのぼるという一種のマジックなのであって,「しっ，しずかに！ とあいず（中村訳)」したのではない。そりの軽々と飛んで行く様を“the down of thistle”(*l*.54)とはよく譬えたものである。“down”はもともと，がちょうやあひるなどの水鳥のむねの軽くて水をはじく羽毛のことで,「風に舞う枯れ葉」にたとえられたそりよりもっと優雅で暖かいそりのイメージを与える。

原詩は二行ずつ押韻のあるcouplet であるが，これを和訳に使うことは，英語と日本語の根本的な相異の為に，たいへん難しい。各二行は，行末の韻を合わすというより行全体のリズムを合わそうと努力する以外に道はな

い。もし，あえて脚韻にこだわれば次のようになって，二行ずつ脚韻は揃うが他の箇所に無理が起こり全体がお粗末になりかねない。

（向山訳）

’れはクリスマスの前の夜，家の中は静か
生き物一つ動かず，ねずみまでそうか

靴下をぶら下げた煙突の横
きっとセント・ニコラスが来るのはそこ

子供達はくるまり，すべて床の中　5
甘いもの舞踊る夢の中

そして，ママはスカーフを，僕はキャップを
冬の長い眠りにつくこれからよ

その時，外の芝生の上でものすごい音がする
何が起きたのか知ろうと跳び起きようとする　10

それ，閃光のように窓へ飛ぶ
シャッターをたたきあけ，窓を押しあげる

新しい雪の胸に落ちる月
まるで下の様子は真昼間の時期

そして，驚きの目に映るものは何　15
ただミニゾリとトナカイ八匹がそこに

小さな運転手は生き生きと早く
すぐにわかった，あれはセント・ニック

鷲よりも速く，迫り来る彼らに
口笛，大声，名前を叫び　20

「それダッシャー，ほれダンサー，ほれプランサーにビクセン！
行けコメット,行けキューピット、行けドンダーにブリッツェン！

軒先の屋根に，壁のてっぺんに
それ，突っ走れ，突っ走れ，突っ走れ，まっすぐに

まるで荒れ狂う台風の前の枯れ葉舞うよう　25
邪魔物に出会うと，空へ駆ける昇るよう

そして家のてっぺんに飛ぶ飛ぶよ彼ら
おもちゃいっぱいのソリとセント・ニコラスも傍ら

そして瞬きの一瞬，屋根の上か
一つ一つひづめが跳ね踊る故か　30

首を引っ込めて，振り返るが早いか
セント・ニコラス跳ねながら煙突から落下

頭から足まで毛皮を着込んだ
灰と煤，通って着物黒ずんだ

おもちゃ，背中にヒョイと背負い　35
今，袋開ける商人の装い

なんと目は輝き，なんと楽しげなえくぼ
まるでほおはバラのように赤く，鼻はさくらんぼ

おどけた口は弓のようにしなり
雪のように白いあごひげの身なり　40

パイプの根元をしっかりかんで
煙，それはリースのように丸く囲んで

大きな顔にまるまるのおなか
笑うとゆれ，まるでゼラチン皿の中

太っちょでデブ，楽しげな小人　45
そして，思わず笑ってしまった僕，ただのひと

瞬きを一つ、首ひねり一つ
いい人と分かれば怖がらず待つ

言葉一つ話さず，さあすぐに仕事
靴下みな詰めて回ったよグルッと　50

そして，鼻の横に指一つ添え，
首を縦にひとふり煙突のうえ

チームのところへ飛び付き口笛
みんな飛んで行く，まるで綿毛の行く末

でも見えなくなる前に聞こえたよ叫びを　55
「みんな素晴らしいクリスマスを！そして素晴らしいこの夜を！」

以上は脚韻を合わせることに力を注いだので，軽薄になった行も多い。

語り手は一家の主である父親であるが，語り手が自分のことを「とうさん」というのは，語り手が第一人称であることが薄れるのと，幼少の子供達にはよいかもしれないが，青年やおとなの読者には不向きである。語り手を「わたし」にした方が一人称であることがはっきりし読者も語り手から直接話を聴いている気持ちになる。

翻訳に苦労が多い割りには結果が思うようには出来上がらない。特に最初に手懸けた訳者の苦労は並大抵なものではない。数多くの人が同じ作品を何度も試みて良い翻訳が出来上がる。本学においても毎年クリスマスが来るたびに学生たちが挙ってこの作品の翻訳に挑戦するのがよい。以下は，本学英文学科の現三年生が前年のクリスマスの頃から何度も書き変え，まだまだ完璧とは言えないかもしれないが，原詩の内容に出来る限り忠実に，且つcoupletのリズムを合わせるように努力した成果の和訳をここに原作を添えて紹介します。

クリスマスのまえのばん

クレメント・クラーク・ムーア作

梅光女学院大学文学部英文学科３年生訳（1991）

代表－鶴　岡　祐　子

あれは　クリスマスの　まえのばんの　ことだった。
うちじゅう　いきものなにひとつ　ねずみ―ぴきすら　おとを　たてなくて。

はやく　サンタクロース　こないかなと，
だんろの　そばには　きちんと　くつした　つりさげて。

こどもたち　みな　きもちよく　ベッドに　もぐりこみ，　5
シュガー・プラムの　ゆめを　みる。

そして，スカーフを　あたまにまいたかあさんと，
　　ナイトキャップをかぶったとうさんも
ふゆの　よの　ながいねむりに　つくところ。

そのとき　そとの　しばふのほうで　「ガタガタ」と　おとがなりだした。
どうしたのだろうと　おもって　ベッドからとびおきてみる。　10

わたしは　まどのほうへ　すばやくとびつき，
シャッターを　たたきあけ、ガラスまどを　あげた。

そとでは　あたらしく　ふりつもった　ゆきの　むねを　てらす　つきが
ちじょうの　すべてのものに　ひるまの　あかるさを　ふりそそいでいる。

わたしの　ふしぎに　みちために　うつるものは　なに？　15
それは　ほんのちいさな　そり　と　8ひきの　となかい－－

すばやくて　いきいきした　ちいさな　うんてんしゅ
わたしは　すぐに　それが　サンタだと　わかったのさ。

ワシよりも　はやく　せまってくる　トナカイ
そして　サンタは　くちぶえでよび，おおごえをあげて，
　　トナカイたちの　なまえをよんだ。　20

「それ，ダッシャー！　それ、ダンサー！　それ，プランサーにビクセン！
すすめ，コメット！　すすめ，キュウピッド！
　　すすめ，ダンダーにブリッツェン！

げんかんの　やねに！　へいの　うえに！
さあ　はしれ！　はしれ！　みんな　げんきよくはしれ！」

つよいかぜに　とばされる　かれはの　ように　25
じゃまものが　あると　そらに　まいあがり

そのとき　やねのうえへと　かけあがる
そりいっぱいの　おもちゃのやまと，サンタクロースもいっしょに。

そしてつぎのしゅんかん，やねのうえ，
かわいい　ひずめが　はねて　たたくおとがする。　30

わたしは　あたまを　ひっこめて、うしろを　ふりむくと，……
サンタが　えんとつから　はね　おりてきた。

あたまの　てっぺんから　あしのさきまで
ぜんぶ　けがわを　きていた，
かれの　ふくは　はいと　すすで　よごれきっている。

せなかにかけた　おもちゃの　ふくろを　ふりおろし，　35
サンタは　つつみを　あける　ものうりに　そっくりだった。

めといえば，キラキラとかがやいていて，えくぼは　とても　あいらしく，
ほっぺは　バラのようにあかく，はなは　あかいサクランボのよう。

おどけた　ちいさな　くちは　ゆみのように　はっていて，
あごひげは　まるでゆきのように　しろく，　40

パイプの　えを　しっかりと　はで　くわえ，
けむりが　はなのかんむりの　ように　あたまを　とりまいてた。

よこっぴろいかお，かわいくて　まるい　おなか

わらうと，ボールいっぱいの　ゼリーのように　ゆれて

ぽちゃぽちゃ　まるまると　ふとっていて，ゆかいな
こびとのおじいさん。　45
サンタを　みたとき，わたしは　おもわず　ふきだした。

かためを　つむって　ウインクして，あたまを　よこに　ふったかれ，
なにも　おそれることないと　すぐに　おしえてくれた。

ひとことも　くちに　せず，サンタは　しごとに　とりかかり，
くつしたに　つめこむと，グルッとふりかえり，　50

はなの　よこに　ゆびを　おき，
あたまを　たてに　ひとふりすると，えんとつのなかへと　とびあがる。

そりに　とびのり，トナカイたちを　くちぶえでよび，
あざみの　ふんわりわたげのように　みんな　そろって　まいあがる。

でも，サンタがみえなくなるまえに，サンタのさけびが
きこえてきた。　55
「みんな，みんな　ハッピークリスマス！　そして　みんなに　よいよるを！」

The Night Before Christmas

By Clement Clarke Moore (1777－1863)

'Twas the night before Christmas when all through the house
Not a creature was stirring, not even a mouse.

The stockings were hung by the chimney with care,
In hopes thst St. Nicholas soon would be there.

The children were nestled all sung in their beds, 5
While visions of sugarplums danced in their heads,

And mama in her kerchief, and I in my cap,
Had just settled down for a long winter's nap.

When out on the lawn there arose such a clatter,
I sprang from the bed to see what was the matter. 10

Away to the window I flew like a flash,
Tore open the shutters and threw up the sash.

The moon on the breast of the new—fallen snow,
Gave the luster of midday to objects below,

When what to my wondering eyes should appear, 15
But a miniature sleigh and eight tiny reindeer ; ——

With a little old driver so lively and quick,
I knew in a moment it must be St. Nick.

More rapid than eagles his coursers they came.
And he whistled, and shouted, and called them by name : 20

"Now, Dasher ! Now, Dancer ! Now, Prancer ! and Vixen !
On, Comet ! On, Cupid ! On, Donder and Blitzen !

To the top of the porch, to the top of the wall !
Now, dash away, dash away, dash away all ! "

As dry leaves that before the wild hurricane fly, 25
When they meet with an obstacle, mount to the sky,

So up to the housetop the coursers they flew
With the sleigh full of toys, and St. Nicholas, too.

And then in a twinkle, I heard on the roof
The prancing and pawing of each little hoof. 30

As I drew in my head, and was turning around,
Down the chimney St. Nicholas came with a bound.

He was dressed all in fur from his head to his foot,
And his clothes were all tarnished with ashes and soot ;

A bundle of toys he had flung on his back, 35
And he looked like a peddler just opening his pack.

His eyes——how they twinkled ! his dimples how merry !
His cheeks were like roses, his nose like a cherry.

His droll little mouth was drawn up like a bow,
And the beard on his chin was as white as the snow. 40

The stump of a pipe he held tight in his teeth,
And the smoke it encircled his head like a wreath.

He had a broad face and little round belly
That shook when he langhed like a bowl full of jelly.

He was chubby and plump, a right jolly old elf. 45
And I laughed when I saw him in spite of myseif.

A wink of his eye and a twist of his head,
Soon gave me to know I had nothing to dread ;

He spoke not a word, but went straight to his work,
And filled all the stockings－－then turned with a jerk,. 50

And laying his finger aside of his nose,
And giving a nod, up the chimney he rose.

He sprang to his sleigh, to his team gave a whistle,
And away they all flew like the down of a thistle.

But I heard him exclaim, ere he drove out of sight, 55
"Happy Christmas to all and to all a good night."